

# 潟環境研究所ニュースレター

Wetland Environment Research Laboratory, City of Niigata

第 4 号 2016年2月  
新潟市

潟と人とのより良い関係を探求し、  
潟の魅力と価値を再発見・再構築。

- ・越後平野4潟の魚類相…………… P. 2
- ・「潟の記憶」を求めてあるく・きく・とる… P. 3
- ・鳥のくらしと水辺の環境…………… P. 4
- ・宮城県仙北平野のラムサールライオンを視察して… P. 6
- ・素顔の「潟」スナップ・漁食クッキング・知ッテタ?カタ?カタ?… P. 7
- ・潟のエッセイ…………… P. 8

「上空から見た佐潟」 撮影：王毅氏

## 佐潟ラムサール登録20周年に寄せて

涌井 晴之 潟環境研究所外部相談員／佐潟と歩む赤塚の会代表

佐潟は今年ラムサール条約の登録湿地となって20周年を迎えます。1971年にイランのラムサールという町で国際会議が開かれて、「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」が決定されました。

日本は1980年に同条約に加入の際に釧路湿原を登録。佐潟は1996年、日本で10番目の同条約登録湿地となりました。現在、国内の登録湿地は50カ所まで増えて、県内では佐潟と、福島県・群馬県にもまたがる尾瀬、瓢湖が登録されています。登録認定を受けて当時の新潟市長、長谷川義明氏は「保全に万全を期して、後世に継承していきたい」と話しました。

2006年12月に10周年を記念して「鳥がたなぐ潟と人」と題してフェスティバルが開かれました。私も地元の団体として実行委員会に参加しました。この中で3つの潟の発表として佐潟、福島潟、鳥屋野潟での保全などについて報告が行われました。佐潟で取り組んでいるドロ上げ、ヨシ刈りの潟普請について報告しました。翌日、赤塚の会場で開かれた「KODOMOラムサール湿地交流」では赤塚小学校の児童をはじめ東北・関東地方の登録湿地の地元児童らによる日頃の活動発表が行われました。「湿地は命の源、みんなの宝 大事に守って次の世代へつなげよう」とのメッセージが採択されました。「先人が地域の財産である佐潟を守り伝えたように、私たちはそのバトンを受け継ぎ、次の世代を担う子どもたちに引き継がなければならない」と呼びかけたことを思い出します。

条約では賢明な利用（ワイズユース）を提唱しています。ワイズユースとは湿地の生態系を維持しつつ、そこから得られる恵みを持続的に活用することです。地元では佐潟を通して立場を超えた交流が生まれ、地域づくりのアイデアへとつながっています。社会情勢の変化もあり、新たな人と潟の関係づくりが模索されています。佐潟が「里潟」として今後も10年、20年と市民と新たな水辺の関係づくりを築くために活動していきたいです。



潟普請で刈り取られたヨシを回収する参加者（2015年9月20日）

※市では、今年、ラムサール条約登録20周年を記念する事業を予定しています。今後、市報やホームページなどでお知らせします。



越後平野の中心部、新潟市に存在する主要な潟は、信濃川や阿賀野川の河跡湖であり、日本海ともつながっていました。まわりの水域との移動障害がなかったため、一生を湖沼や河川で過ごす純淡水魚のほか、海と往来する回遊魚や、河口域や沿岸部に生息する汽水・海水魚も加わり、豊かな魚類相を擁していました。

現地調査のデータや聞き取り情報を加えた結果では、これまで66種類ほどの魚類が確認されています。内訳は純淡水魚が41種、回遊魚が15種、汽水・海水魚が10種です。この中には、県内絶滅のゼニタナゴや、今ではほとんど見ることができなくなったニホンイトヨ（イトヨ）やトミヨ類も含まれています。

干拓によって多くの潟湖が姿を消し、農地の乾田化や治水事業による環境変化、持ち込まれた外来魚によって、越後平野の魚類相は大きく変化し、まるで違ったものとなりました。主な潟の魚類相の概況は下記のようになります。

◆福島潟

昭和36（1961）年、新井郷川排水機場が稼働、以後海産魚はほとんど見られなくなりました。過去の記録も含めて54種類が確認されていますが、外来魚が、21種を占めている点が注目されます。カジカ大卵型やアカザ、ホトケドジョウなど上流河川からの流下があるのも特徴的です。

◆鳥屋野潟

昭和23（1948）年、栗ノ木川排水機場が稼働、それまでは潮位の変化を受けて海水が侵入、多種類の海産魚が遡上してきました。現在30種前後が確認されていますが、20種類前後はまったく確認できなくなりました。

◆佐潟

周辺砂丘からの湧水はあるものの、砂丘列間のくぼ地に成立する「砂丘湖」とは成因が異なっている

ようです。潟環境研究所研究補助員の太田和宏氏によれば、「江戸時代中期には潟の出口に水門が設置された記録が残っている」とのことです。古い時代には、新川から広通江を通じて魚類の遡上があったと思われますが、それが絶たれて現在の魚類相は極めて単純です。12種が確認されていますが、うち7種は外来魚であり、放流のウナギを加えると、在来魚は4種しか残らないこととなります。

◆上堰潟

干拓事業により昭和50年代に完全に干上がり、その後湖底を掘り込んで遊水池を兼ねた公園として整備されました。過去の魚類相は不明ですが、現在18種が確認されています。非灌漑期には、新川～広通川～西山川を通じてサケの迷入もあります。

《鑑潟》

昭和41（1966）年、干拓によって消滅しましたが、干拓前の魚類相の記録が残っており、越後平野の魚類相の原型が見てとれます。県内絶滅のゼニタナゴ、市内絶滅のシナイモツゴやトミヨ類、希少魚種のアカザやカマキリ（アユカケ）、ホトケドジョウなど48種が記録され、コノシロやサヨリ、スズキ、ヌマガレイなどの海産魚も多数含まれています。外来魚11種も記録されていますが、終戦前後に持ち込まれた古典的な魚種がほとんどです。

表1 越後平野の湖沼で記録された魚類の生活史区分

生活史区分		該当種
純淡水魚 41種	一生を淡水中で過ごす (ウグイの一部は降海)	コイ・ゲンゴロウブナ・ギンブナ・タイリクバラタナゴ・オイカワ・ウグイ・モツゴ・タモロコ・ニゴイ・ドジョウ・シマドジョウ・ナマズ・キタノメダカ・オオクチバス・ジュズカケハゼ・カムルチー（ライギョ） など
回遊魚 15種	遡河回遊魚 8種	川で生まれて海で成長、川に遡上して産卵
	降河回遊魚 2種	海で生まれて川で成長、海に下って産卵
	両側回遊魚 5種	川で生まれてすぐに海に下り、短期間の後に川に遡上して成長
汽水・海水魚 10種	河口付近の汽水域で過ごすか、ふだん海水中で過ごして一時的に川に侵入	サヨリ・スズキ・シマイサキ・クロダイ・ボラ・メナダ・コノシロ・マハゼ・クサフグ など

表2 越後平野の湖沼に生息する魚類相の状況

確認状況	福島潟	鳥屋野潟	佐潟	上堰潟	鑑潟
○ 近年の確認情報あり	33	25	12	17	0
△ 稀な確認、迷入	12	5	0	1	0
▲ 近年確認情報がない	9	19	0	0	48
種数合計	54	49	12	18	48
(うち外来種)	21	17	7	10	11

備考：外来種には、国内外来、国外外来を含む

### 「潟の記憶」記録映像制作

昭和30年代以前、新潟の「潟」は、人の暮らしのすぐそばにありました。現在では都市の中の貴重な水辺となった潟。人は潟とどのように関わってきたのでしょうか。平成27年度は、潟端での暮らしの「記憶」を求めて、福島潟、鳥屋野潟、上堰潟、佐潟の近くで暮らしてきた、60歳代から90歳代の人々から聞き取りをし、また、現在の漁や採集活動の様子なども、映像で記録してきました。以下では、その中で見えてきた潟の産物とそれをめぐる人々の営みに注目してみたいと思います。



撮影の様子

### 潟でとれるもの

ヒシの実、ハスの実、ライギョ、フナ、コイ、エビ・カニ、雑魚。これらは私が潟を訪れる中で、潟端地域の皆さんからいただいたものです。一見、何もなさそうに見える潟で、食べられるものがこんなにあるのかと驚きました。しかも、実際に食べてみると意外においしいのです。



新鼻甲自治会が調理した「ハスの実とヒシの実のおこわ」



ハスの花の出荷作業。10本ずつ束にして、茎の長さを揃えて切り落とす。

食べてみると意外においしいのです。

福島潟では、近年、新鼻甲自治会が福島潟で採れたヒシの実やハスの実などを使った料理を作り、地域の催しで振る舞っています。これらは日常的に食されるものではありませんが、「食」から潟を知る良い機会になります。

他にも潟端の動植物はさまざまな形で、暮らしの中に利用されています。例えば、佐潟では、例年8月7日頃から13日まで

の間、赤塚地域の人々が早朝から舟をだし、ハスの花取りをしています。そこで刈り取られた花は、お盆期間に、近隣の商店で販売され、墓前や仏壇に供える仏花として使われます。

### 潟の産物をめぐる人々の営み 潟は漁場だった

かつて新潟市内の潟は豊かな漁場であり、昭和40年頃まで、簀立てを用いた本格的な漁から、農家の副収入や子どもの小遣い稼ぎ、自給のための魚捕りまで、盛んに行われていました。

鳥屋野潟近くに住む90歳代のある農家の人は、農閑期に潟で漁をした経験があり、魚をはじめとする潟の産物は「いい小遣いになった」といいます。こうした語りからは、その当時、稲作や畑作と潟の産物の利用を組み合わせた暮らしがあったことがうかがえます。

小規模ながら福島潟、佐潟、鳥屋野潟では、いまでも漁をしている人々がいます。今回、鳥屋野潟漁業協同組合の皆さんに、刺し網や投網とあみを使った漁



の実演、そして、かつて使われていた「オウギアミ」を用いた漁の再現をしてもらいました。全長5メートルもあるこの網は、潟や川での追い込み漁に使われていました。漁に携わる人が減り、潟の環境が変化していくなかで、使われなくなった漁具や漁法がいくつもあります。漁具や漁法は生息する魚類の生態、自然環境に応じて考え出されており、人が潟をどのように利用していたのかを知ることができるといいます。

潟から生活の糧を得ていた時代を知る人は少なくなりました。しかし、子どもの時の経験、あるいは親や祖父母から伝え聞いた話を掘り起こすことで、かつての豊かな潟との関わり方が見えてくるのではないのでしょうか。潟端を「あるき」、出会った人々から「きき」、「とって」きた「潟の記憶」。潟端の営みとそれを支えてきた人々をもう一度見直し、将来の持続的な潟の利用につながるように伝えていきたいと考えています。



鳥屋野潟でオウギアミを使う。舟の上から水中に網をいれ、前方から魚を追い込んでくる舟を待ち構える。

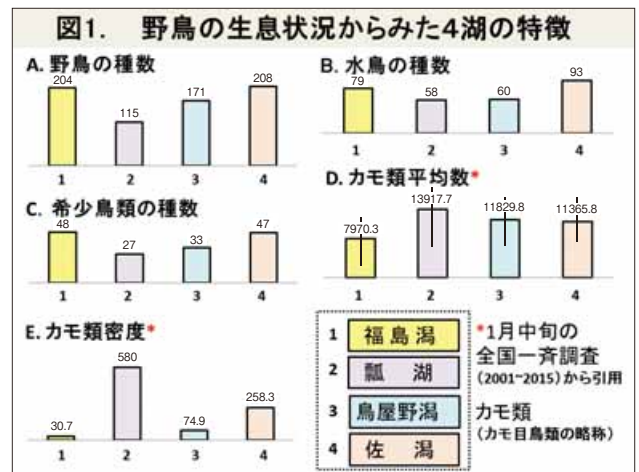


I. 自然環境と鳥相の概観

(1) 新潟平野の自然環境と4潟湖の特徴：新潟県は文字どおり「潟の国」です。悠久の流れを滲<sup>た</sup>えて日本海へ注ぐ2つの大河(信濃川と阿賀野川)は、無数の水脈となって広大な新潟平野をかたち作り、多くの潟湖を生み出しました。人間活動はこの広い低湿地を広大な穀倉地帯に変え、大小の集落・都市を発達させてきたのです。幸いにも新潟平野に残ったこれらの潟湖は、今や水鳥をはじめ多くの動植物が生息・生育するかけがえのない身近な自然として大切な役割を果たしています。ここで紹介する4つの潟湖(福島潟、瓢湖、鳥屋野潟、佐潟)は、立地条件や自然条件に関して類似点と共に相違点(水面積の広さ、流入河川数、成因、周囲の景観・人為環境化の程度)が見られます(表1)。

(2) 野生鳥類からみた4潟湖の特徴：一般に、潟湖は野鳥の生息地として鳥相(一定地域に住む鳥類の全種とその特徴)が豊かで、冬を中心に生息密度の高い場所として知られています。いずれも日本の重要湿地や鳥獣保護区(事由：集団渡来地)に指定され、法制上も保護・保全が優先される場所になっています(表1)。野鳥の側から4つの潟湖を比べると、生息する種類や希少種の出現数が多い水辺は福島潟や佐潟で、次いで鳥屋野潟と瓢湖となります。一方、カモ目鳥類の個体数密度に注目すると瓢湖が抜きんでて高く、次いで佐潟、鳥屋野潟、福島潟の順となり、それぞれ自然環境の多様性や人工給餌の有無等を反映した特徴が認められます(図1)。

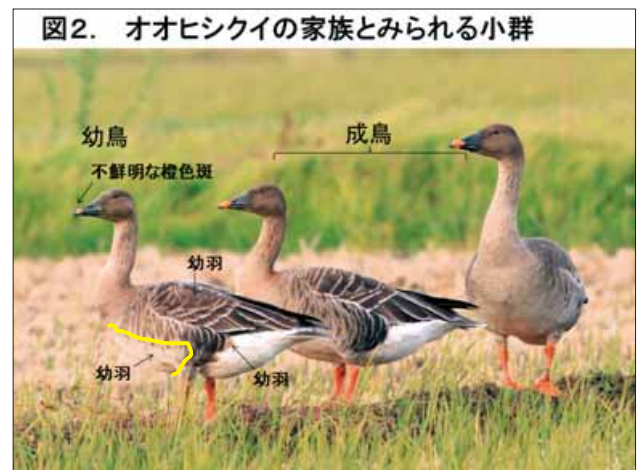
	福島潟	瓢湖	鳥屋野潟	佐潟
分類	潟湖	人造湖	潟湖	潟湖
水面積	260ha	13ha	158ha	44ha
水面標高	-0.7m	+8m	-2.5m	+4.5m
水深	1m	0.7m	1m	0.5m
水源	河川	河川	河川	湧水
(河川数)	(13本)	(1本)	(33本)	
日本の重要湿地500	指定	指定	指定	指定
鳥獣保護区(面積)	国指定(231ha)	国指定(281ha)	県指定(264ha)	国指定(251ha)
指定事由	集団渡来地	集団渡来地	集団渡来地	集団渡来地
ラムサール条約		2008年指定		1996年指定
天然記念物指定		ハクチョウ渡来地		



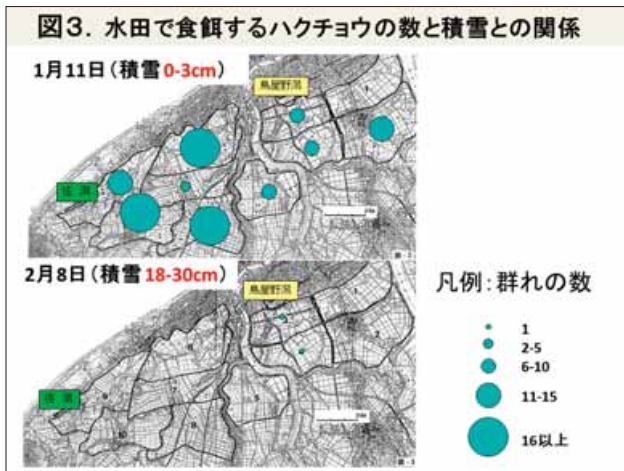
II. 大型水禽類の越冬生活

(1) 大型水禽類の名前：ハクチョウとガンは大型水禽類を代表する水鳥です。冬鳥として日本に渡来するハクチョウには生物学的に別種のオオハクチョウとコハクチョウがあり、後者については繁殖地の異なるアジア産コハクチョウと北米産コハクチョウが亜種として区別されています。なお、新潟県に渡来するガン類には、ヒシクイ、マガン、シジウカラガン、ハクガン等の希少種がいます。

(2) ヒシクイ類の多様な姿と分類の変遷：ヒシクイは多形種(同一種の個体の変異に富む状態)で、その系統分類は長年研究者を悩ませ、分類体系も変遷してきました。日本ではヒシクイが3亜種(亜種ヒシクイ、亜種オオヒシクイ、亜種ヒメヒシクイ)が記録されていますが、DNA分析を加えた最近の成果によれば、亜種ヒシクイはそのままで、亜種ヒメヒシクイは別亜種ロシアヒシクイに包含され、亜種オオヒシクイ(図2)は別種オオヒシクイに格上げすべきであると主張されています。新潟平野にはオオヒシクイ以外に少数のヒシクイ別亜種が複数飛来することがわかっており、生物多様性や希少種保護の観点からそれらの形態や生態を解明し、DNAを比較検討することが重要な課題になっています。



(3) 越冬生活の概要とコミュニケーション：新潟平野は日本に渡来するコハクチョウの最も重要な越冬地の1つであり、個体数は最近数十年間で明瞭な増加を示しています。その背景には冬季における採食環境の改善や保護思想の浸透があり、埤（ネグラ）も潟湖中心に河川中州や湛水された水田（冬水たんぼ）へと広がっています。ハクチョウはペアや家族の絆が強く、これらを中核とした様々な規模の群れで埤（湖沼）と餌場（水田）を往来し、積雪状態にも応じた越冬生活を送っています（図3）。群れ生活は個体間の相互作用に因るもので、各種誇示行動と音声は、コミュニケーション手段として家族のまとまりや群れの動向を左右する重要な役割を担っています（図4）。

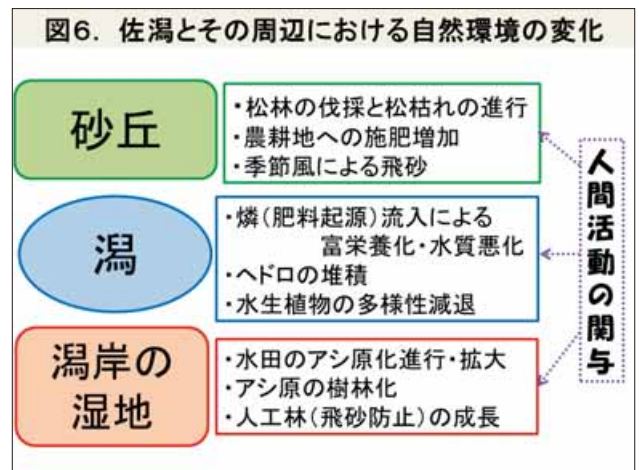


### Ⅲ. 環境の変化と野鳥の暮らし

(1) 水田を利用する水鳥の餌生物：潟湖の周辺にある水田は水鳥類の餌場として利用される程度が高く、大型水禽にとっては特に重要です。ハクチョウとガンは冬季の水田を共通の餌場としていますが、口器構造の違いを反映した異なる方法で餌を食い分けしています。すなわち、前者は稲の落ち籾を主に濾過食し、後者は稲の再生稈等をかじり取っています（図5）。また、水田は年間を通じて様々な野鳥の餌場に利用されており、晩春から初夏の頃は、各種の小型動物（ドジョウ、巻貝、ヒル、ミミズ、昆虫類等）を求めてカモメ類やシギチドリ類が飛来し、これらを捕食して渡りのエネルギー源にしています。



(2) 佐潟での事例：1996年新潟県初のラムサール条約湿地に登録された佐潟では、潟での人間活動がしばらく減退した時期があり、周りの砂丘地における農業形態の変化とも相まって潟の自然環境が大きく変化しました（図6）。このため、劣化した潟環境の回復に向けて協議や実践活動が続いています。潟の沿岸ではヨシ原の拡大やブッシュの増加により、増えた鳥（ヨシ原と密接な関係を持つオオヨシキリやオオジュリン等の小鳥）や繁殖のために定着した鳥（アオジやウグイス）、さらに短期間繁殖した鳥（広い草地に営巣するタカ類の一種チュウビ）等がいる一方、かつて水田や水辺に普通にみられた鳥の中には、バン、タシギ、タゲリ等のように、大幅に個体数が減少したものもいます。



(3) 福島潟（湖岸の草地）での事例：福島潟では干拓による農地の拡大、農業構造の変化に伴う休耕田の増加と植生遷移、また、河川改修工事に伴う自然環境の攪乱等が相次いでいます。この間、湖岸の湿性草地では、希少種コジュリンの繁殖分布や個体数の変化（増加とその後の減少）、セッカ（小鳥）やセイタカシギの一過性繁殖等が観察されています。

終わりに：水辺における野鳥とその暮らしを俯瞰していつも感じることは、豊かな生態系にはそのシンボルとなるアンブレラ種（オジロワシ等）が息づいていることです。それらが継続して生息できるよう、関係者が知恵を出し合い、最善を尽くしていく必要があります。



佐潟は1996年3月にラムサール条約に登録されました。この2016年3月で20周年を迎えます。この間、阿賀野市の瓢湖が2008年にラムサール条約登録湿地になりましたが、新潟市の福島潟や鳥屋野潟は登録への動きはありませんでした。それはラムサール条約に登録されると、潟やその周辺の利用・整備ができなくなるという先入観があり、進展しなかったものと考えています。現実にはラムサール条約には、湿地とそこで生息する生き物たちが消滅しないかぎり、湿地の賢明な利用を図るという「ワイズユース」の考え方があり、潟の利用や人の生活を守るための整備に対する規制はほとんどありません。

### 仙北平野のラムサールトライアングル

ところで、越後平野と同じような低湿地帯である宮城県の仙北平野には近接してラムサール条約登録湿地が3か所もあり、「ラムサールトライアングル」と呼ばれています（図参照）。それを2015年12月初めに視察に行ってきたので、その報告を兼ねながら、今後の越後平野でのラムサール条約登録の方向性について考えてみたいと思います。



化女沼ダム（出典：宮城県「化女沼ダム」パンフレット）

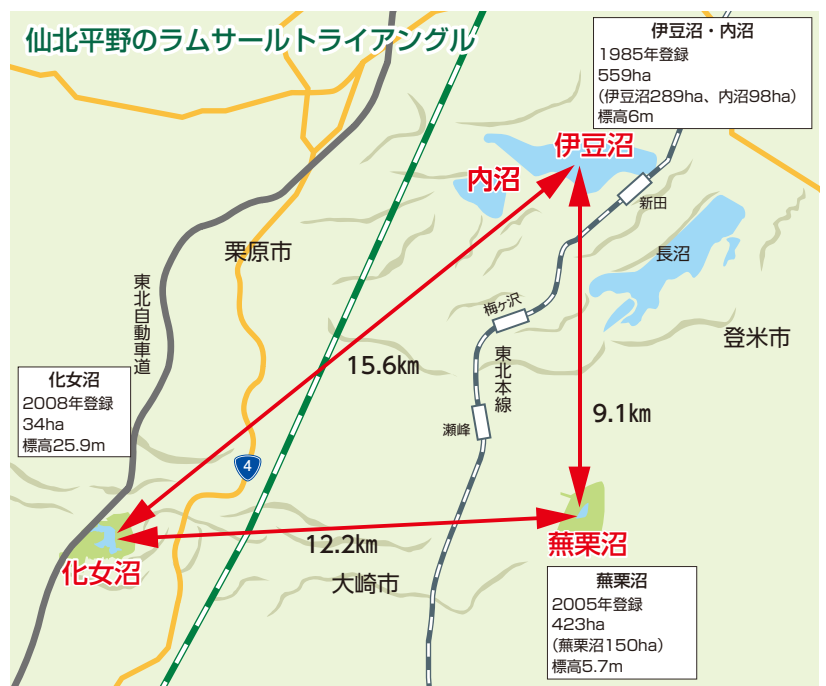
仙北平野では、伊豆沼・内沼が1985年に国内2番目のラムサール条約登録湿地となり、その20年後の2005年に蕪栗沼（かぶりぬま）が、そしてその3年後の2008年に化女沼（けじょぬま）が登録されました。この3つの沼はいずれも洪水調節池を兼ねており、その中でも化女沼は完全なるダム湖です＝写真＝。今回の視察で参考になったことは、水鳥や湿地の恵みを利用した農業・観光・環境教育などワイズユースが広範に図られていたことです。

越後平野の佐潟、鳥屋野潟、福島潟は、その間の距離が約17.5キロメートルで、鳥屋野潟と福島潟が洪水調節池となっており、仙北平野の湖沼群と類似しているといえます。ただ大きな相違は、仙北平野の湖沼群が農村地域にあるのと比較して、新潟の潟群は80万人という政令指定都市の中にあり、特に鳥屋野潟は市街地に近接して

いることでしょう。新潟市にとって、これらの潟群がラムサール条約に登録される意義は、大都市において「自然との共生」を国内外に表明するとともに、人口が多いゆえにより活発なワイズユースが展開できる可能性が高いことにあるといえます。

### 「潟」への市民の誇りを育てる

20世紀は自然と対峙して、恵みの収奪と災害の克服で自然を破壊してきました。21世紀は、その反省の上に、かろうじて残された自然との共生が地球的規模で求められています。それを率先して新潟市が宣言することは、国際的に評価を高めることになるでしょう。ラムサール条約に登録されるか否かにかかわらず、今かろうじて残された自然を保全し次代に伝えていくことは新潟市民にとって不可欠な責務であると思います。とするならば、ラムサール条約に登録するとともに、潟と人との関係性を農漁業や潟利用を含めて再構築し、新潟らしい潟文化を発信することは喫緊の課題ではないでしょうか。ラムサール条約登録は、潟への市民の誇りを育て、政令指定都市としての品格を高めることになり、国内外からの観光客の増加につながるのではないかと考えます。



「仙北平野ラムサールトライアングル」にならって、福島潟、鳥屋野潟が登録され、瓢湖を含め、「越後平野ラムサールカルテット」と呼ばれる日が来ることを期待しています。

# 素顔の「潟」スナップ < 4 >



潟…どんな風景が思い浮かびますか？

このコーナーでは、潟環境研究所スタッフが潟に行って、見て、感じた「潟」の素顔を紹介します。

## 北山池 (江南区)



亀田砂丘のくぼ地にできた池。池を中心に整備された公園では緑色の花を咲かせる桜「御衣黄（ぎよいこう）」がありますよ。

## 北上の池 (秋葉区)



能代川左岸の堤防沿いにある小さな池でした。地元では「切所（きりしょ）」と呼ばれているそうです。

## 六郷ノ池 (秋葉区)



阿賀野川の湾曲（蛇行）部の内部にできた旧河道。知る人ぞ知る雰囲気の良い場所でした。



## 潟食クッキング

### ③ 鮎のコモ被り

美しく豊かな自然が残る潟は、食の宝庫でもあります。

今回は、福島潟周辺の郷土料理「鮎のコモ被り」についてご紹介します。このコーナーではおなじみの、食文化研究家の丸山久子さんから教えていただきました。

\*\*\*\*\*

鮎は、昭和30年頃までは新潟市では身近な食材で、大事な動物性たんぱく源でもありました。稲の収穫が終わった頃から捕れる鮎がおいしく、この時期になると、「鮎捕りは実用を兼ねた親子のアソビの1つだった」と当時の様子を顔をほころばせながら語ってくれた古老のことを思い出します。

鮎の食べ方は、行事食から普段食まで各種ありましたが、鮎のコモ被りは福島潟のお節料理の1つでした。鮎の上に盛りつける大根、ニンジン、切り昆布が、マコモやワラで編んだ生活用具のコモのようにも見たことが名前の由来になったのではないかと思います。この「鮎のコモ被り」をはじめ、昨今は、全国はもちろん、新潟市内でも当時の鮎の食べ方については、あまり知られていないように感じています。

ちなみに、日本各地の鮎の郷土料理をみると「鮎鮓（琵琶湖）」「鮎飯（岡山県）」「ふなこぐい（佐賀県・鹿島市）」「鮎鮓（長野県）」など多数あります。



#### 【材料】(5人分)

- 小鮎 10~15匹
- 切り昆布 50g、大根 500g、ニンジン 100g
- 調味料：しょうゆ、みりん、酒

#### 【作り方 (当時の調理法をもとに)】

- ① 鍋（現在では電子レンジや圧力鍋などでも可）に焼いた鮎と昆布を入れ、タツプリの水に鮎の骨が柔らかくなるまで弱火でゆっくり煮る。  
※寒鮎（小鮎6~7cm）は捕った直後に塩をふり、串に刺して囲炉裏で焼き、まっこう（巻わら）に刺して保存しました。
- ② コモ材：鮎を煮た汁に千切りニンジンと大根を入れ、火が通ったら昆布（鮎と一緒に煮た昆布）を合わせて味を整える
- ③ 盛りつけ：皿に鮎を盛り、コモ材を飾り盛りする

## ミニ知識

### 知ッテタ？カタ？カタ？

湿地というと、皆さんはどのような場所を思い浮かべますか。水で湿った草原をなんとなく想像していませんか。そこで今回は、ラムサール条約での湿地についてご紹介しましょう。

条約では、例えば、身近な水田、農業用水路をはじめ、ため池や大規模なダム湖、そして植物が生き茂るマングローブ林や海のサンゴ礁までもが湿地とされています。とても幅広いですね！



# 「潟」のエッセイ

## ④ ガタモノガタリ

松浦和美／新潟市南商工振興会・株式会社U・STYLE代表取締役



事務所前に広がる鳥屋野潟

私のデザイン会社で「地域ブランディング」を事業の一つに掲げて2年目になる。昨春はそれをより進めるために、その拠点となる鳥屋野潟の畔に事務所ごと引っ越した。

そもそものきっかけは4年前前にさかのぼる。鳥屋野潟の昔を知る方から当時の様子を聞いた。

「泳いでいたんだよ、きれいだったんだ」「海の魚もあがってきてさ」「舟で行き来したんだ」



潟ボーイ'Sシリーズ

新鮮だった。かつての暮らしを知ることで、それまで扁平だった新潟の印象が変わった。これを「潟ボーイ'S」という冊子にまとめたところ、思いのほか反響があった。

その後も「潟ボーイ'S」シリーズをつくっているが、語り継ぎの取材は地域資源の発見につながっている。これをデザイナー的に発信したい、「潟マルシェ」を思いついたのはそんな理由からだ。

ここでは伝統工芸の三角だるまをリデザインした「潟のしずく」や、農家やパン職人とコラボしたパンなどを「ガタモノガタリ」のブランド名で企画・販売している。マルシェでは、潟端の住民・農家・伝統工芸職人・障がい者福祉施設・パン職人・木工作家などとのコラ

ボレーションが進んでいる。月一回の定期開催となり、これら体験と仕事のシェアは鳥屋野潟に定着しつつある。これからは新潟市内16の潟やその周辺の人々と連携することもやってみたい。

2016年は「とやの潟ウインターキッチン」「G7キッチン」や超小型モビリティを使った社会実験、併せて地域の企業・教育機関と連携した「水浄化ロボット開発プロジェクト」などを、潟と関連して進めていく。

ヘンテコなことばかりやっているせいか、面白がってきてくれるインターンシップの学生も多い。その中から、今、スタッフとして加わっている人もいる。将来、デザインや研究開発などの「クリエイティブクラス」といわれる層や海外の人たちが、ここを訪れ暮らすようになってほしい。どうか、この先。自分たちと潟の変化が楽しみだ。



潟マルシェの様子

※潟マルシェは、平成27年11月より毎月第3日曜日に、株式会社U・STYLE スタジオ（中央区上沼651）にて開催しています。

### 新潟市潟環境研究所について

本市には、地域の暮らしに根差した「里潟（さとかた）」ともいべき個性豊かな潟が多く残っています。当研究所は、これらの潟と人とのより良い関係を探求し、潟の魅力や価値を再発見・再構築するため、平成26年4月に発足しました。

潟に関わる多くの皆さまと連携しながら、自然環境や歴史、暮らし文化などについて、調査・研究を進めています。

### 新潟市 潟のデジタル博物館

NIIGATA City Wetland Digital Museum

新潟市内に点在する湖沼「潟」に関わる資料や情報をまとめたデジタル博物館です。

URL <http://www.niigata-satokata.com/>



### 発行

平成28年2月

新潟市地域・魅力創造部 潟環境研究所事務局

〒951-8550

新潟市中央区学校町通1-602-1（市役所本館4階）

☎ 025-226-2072

fax 025-224-3850

e-mail [kataken@city.niigata.lg.jp](mailto:kataken@city.niigata.lg.jp)

URL <http://www.city.niigata.lg.jp/shisei/kataken/index.html>

Facebook  
ページ

